日本語の「習得」に関する動詞の語彙概念構造についての分析

蘇　丹・吉田　光演

広島大学大学院総合科学研究科

An Analysis of Lexical Conceptual Structure of Japanese Verbs of "Acquisition"

Dan SU and Mitsunobu YOSHIDA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: This paper examines Lexical Conceptual Structure (LCS) of Japanese verb group meaning "acquisition" (*gakusyuusuru, manabu, narau, benkyousuru, osameru*, etc.) such as *learn*, *study*, and *acquire* in English. Kageyama (1996) suggests four LCS templates which bases on four aspectual verb classes according to Vendler (1967). And this paper presents that Japanese verbs meaning "acquisition" can be adapted to Kageyama's LCS templates. According to the four aspectual verb classes, Japanese "acquisition" verbs can be classified as activity verbs (*gakusyuusuru*, *manabu*, *narau*, *benkyousuru*) and accomplishment verbs (*osameru*, *syuutokusuru*, *masutasuru*). In conclusion, the paper suggests that [EVENT x ACT (ON-y)] is presented as Lexical Conceptual Structure of Japanese "acquisition" activity verbs, and [[EVENT x ACT ON-y] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]] is presented as Lexical Conceptual Structure of Japanese "acquisition" accomplishment verbs. Especially in the case of accomplishment verbs, "syuutokusuru" is analyzed in terms of telicity and change process. According to Kageyama (2008), Lexical Conceptual Structure of "syuutokusuru" is proposed as [[EVENT x ACT ON-y] CONTROL [[ ] y MOVE [State-Route $p_1<p_2<\ldots<p_n$]]]).

Keywords: lexical semantics, Lexical Conceptual Structure, synonym, activity verbs, accomplishment verbs

１．はじめに

動詞の研究としては、動詞の意味による分類がある。たとえば、英語では馬の走り方を表す移動動詞はgallop, canter, trotというような動詞があり、それぞれ馬が「疾走する」「緩い駆け足で進む」「速歩で駆ける」という意味を表す。Levin (1993) は、このように、動詞の意味特徴を捉え、動詞を意味によってグループに分ける分類方法が動詞分類の一つであると考えている。

本稿で取り扱う「習得」に関する日本語の動詞は「学習する、学ぶ、勉強する、マスターする・習う・練習する・訓練する・研鑽する・修める・修行する・勉学する・習得する…」というような動詞のグループである。Levin (1993: 144) で

は、このグループに対応する “Learn Verbs” という動詞グループがあり、“learn, study, acquire, cram, glean, memorize, read” のような英語の動詞が記述されている。

動詞の意味による分類のほかに、語彙的アスペクトによる動詞分類もある。このような動詞分類については、英語に関するVendler (1967) の4分類と日本語に関する金田一 (1950) の4分類が動詞アスペクトの分析の東西の代表としての古典的な研究である。それぞれの研究における具体的な分類を(1) (2) で示す。

(1) Vendler (1967) の4分類:
状態 (states)、到達 (achievements)、活動(activities)、達成 (accomplishments)

(2) 金田一 (1950) の4分類:
第一種「状態動詞」: 時間の概念を超越し、本来的に状態を表す動詞で、「ている」がつかない。
第二種「継続動詞」: ある時間内続いて行われるような動作・作用を表し、「ている」がつくと動作が進行中であることを意味する。
第三種「瞬間動詞」: 瞬間に終わってしまうような動作・作用を表し、「ている」がつくとその動作・作用の結果の残存を意味する。
第四種の動詞：いつも「～ている」の形で用いられ、ある状態を帯びていることを表す。

日本語の「習得」に関する動詞は以上のVendler (1967) の分類に基づくと、「勉強する」「学ぶ」「習う」「学習する」を「活動動詞」と見なし、「修める」「マスターする」「習得する」を「達成動詞」と見なすことができる。

また、動詞の語彙意味論の研究では語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure、LCSと略す)という理論枠組みがある。これは動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造であり、基本的に意味構造というのと等しい。LCSはJackendoff (1990) などが提唱し、影山 (1996) がそれらの研究を引き継いで、(3)のように4つのタイプの動詞のLCS模式を提案した。

(3) 影山 (1996: 84-87)
A. 静止状態・静止位置 (状態動詞)
[y BE AT - z]
B. 位置変化・状態変化 (到達動詞)
[BECOME [y BE AT - z]]
C. 継続活動 (活動動詞)
[x ACT (ON - y)]
D. 達成動詞
[x ACT (ON y)] CONTROL [BECOME [y BE AT - z]]

影山 (1996: 47) によれば、意味論で通常知られているように、言語の意味には概念的意味と含蓄的意味があるが、概念構造はそのうち概念的意味を表示するものである。概念的意味は言語表現の基本的、根幹的意味であり、統語構造での現れ方に反映されることが多い。当然ながら、これは含蓄的意味を意味論から除外するということではない。含蓄的意味が意味のプロトタイプや、メタファーによる意味拡張に重要な働きをすることは多くの研究から明らかであるが、その場合でもLCSが意味拡張の基盤となるスキーマを提供するものであると考えられる。

本稿の目的は上記の日本語の習得動詞を一つの動詞グループとして、このグループの意味構造を明らかにすることである。動詞の意味構造は統語構造と関係するので、本稿の問題を考察するために統語構造も考慮する。

2. 先行研究

先行研究としては、影山 (1996) と影山 (2005) がそれぞれ活動動詞と擬態語動詞を対象とし、各動詞のLCSを考察している。ここではこれらの研究についてまとめ、本研究を進める上で参照することとする。また、影山 (1996) では英語の副詞hardと活動動詞の共起を検討した。この部分で活動動詞learn, studyの違いも記述されているので、先行研究として検討する。

2.1 影山 (1996) について

影山 (1996) は活動動詞に共通する意味概念を

検討するために、以下のような3つの側面から分析を行った。

(4) ①ACTとACT-ON
②作用対象の場所性
③ACTの継続アスペクト

まず、ACTという概念が提示される。ACTの概念の導入以前では、DO という意味概念がDowty (1979) によって設定され、意図性を含むものと考えられた。しかしながら、意図性は必ずしも活動動詞全体を特徴づける要素ではないと影山は指摘し、その代わりに影山 (1996: 68-69) ではPinker (1989 : 193) のACTという概念を採用した。また、ACTは自動詞 (一項述語) にも他動詞 (二項述語) にも使えるものとし、その構造は (5) のように表される。

(5) 影山 (1996: 68)
a. 非能格自動詞 (図1)
(work, quarrel, talk, rain, shine)

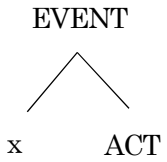

図1

b. 接触・打撃動詞 (図2)
(touch, hit, kiss, slap, kick, push, seize)

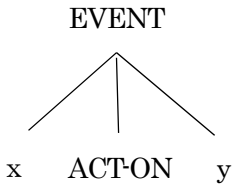

図2

結び付け規則
外項規則：ACTの主語が外項 (x) になる。
内項規則：ACT-ONの対象物が内項 (y) になる。

また、影山 (1996) によれば、(5) の意味構造は2つの特徴を持っている。

1つ目は、この意味構造は自動詞と他動詞の両方に対応しうる。継続活動を表す意味要素として設定されたACTという概念は、一項述語 (5a) としても二項述語 (5b) としても機能することを示している。一項述語として機能する場合には work, talk, dance などの非能格自動詞に対応するのに対し、二項述語としての用法では接触・打撃の他動詞に対応する。従って、非能格自動詞と接触・打撃他動詞はACTという意味概念を共有することになる。

2つ目は、他動詞的な用法では直接目的語に当たる要素 ([x ACT - ON y]のy) が作用対象を表す前置詞概念ONの目的語として、一種の場所的な表現として捉えられていることである。 この「場所的な表現」は作用対象の場所性として把握され、打撃動詞と状態変化動詞の違いと関係する。次の日本語の「てある」構文で具体的な例を挙げる。影山 (1996: 71) によれば、「状態変化の有無」によって対象が区別される。つまり、ACT - ONの目的語は接触・打撃の及ぶ作用対象に過ぎず、状態変化の対象 (Theme) ではないと考えられる。

(6) 影山 (1996: 72)
<u>状態変化</u>
鍵が開けてある。
洗濯物が乾かしてある。
夕食が作ってある。
寿司が握ってある。
<u>接触・打撃</u>
*お父さんの肩がたたいてある。
*ボクシングの相手がなぐってある。
*石が握ってある。

さらに、影山 (1996) はACTの継続アスペクトを明らかにするために、副詞のhardとの共起状況と軽動詞構文を考察した。活動動詞と hard との共起可能性は継続活動を表す非能格自動詞と接触・打撃他動詞との共通性を裏付けるものと考えられる。

影山 (1996) では活動動詞のLCSを考察し、非能格自動詞と接触・打撃動詞という2つのタイプに

分けた。しかし、これですべての活動動詞をカバーできるかどうかは検討する必要がある。また、研究対象が英語動詞であるので、日本語動詞の場合を考察する必要がある。

2.2 影山 (2005) について

影山 (2005) は擬態語動詞、つまり擬態語「うろうろ」などと主動詞「する」のLCSを考察し、普通の動詞のLCSとの違いも指摘した。

まず、擬態語の語彙的性質をアクセントと統語範疇、品詞の限定、アスペクトなどの意味的性質、格の選択、主語や目的語に対する意味制限というような5つの側面から分析し、「擬態語は通常の語彙項目と同等の、意味的・統語的性質を持つと考えられる」という結論が提示された。

また、擬態語と動詞「する」のコラボレーションでは、擬態語動詞の意味が擬態語の意味と「する」の意味の合成によって決まるので、擬態語動詞のLCSも両方の合成であると考えられる。つまり、擬態語動詞の意味はLCS鋳型とLCS内容からなる。例えば、擬態語動詞の「あくせくする」(活動動詞) のLCSは次のように表される。

(7) 影山 (2005: 4)

「する」のLCS鋳型：[EVENT x ACT]

擬態語のLCS内容：<Manner:α> → 擬態語動詞全体のLCS

[EVENT x ACT <Manner:α>]

Xが あくせく する

a. Manner:αは各々の擬態語に特有の様態を表す。
b. 動詞「する」自体のLCSが [x ACT] であり、そこに擬態語の様態が付け加えられて、文全体の意味が解釈される。
c. xが統語構造の主語に対応する。

擬態語動詞の合成的な意味解釈は影山 (2005: 3) によれば、次のようになる。

(8) 影山 (2005: 3)

a. 擬態語そのものは行為 (ACT)、動き (MOVE)、変化 (BECOME)、状態 (STATE)などの概念に伴う特定の様態を表す単語として辞書に登録されている。
b. 擬態語としての「する」は、[x ACT …] や [x CONTROL […]] のような不完全なLCS鋳型を持ち、未指定の部分は擬態語によって補われる。
c. 擬態語動詞(ブラブラする)全体の意味は、擬態語(ブラブラ)の意味構造(α)を「する」のLCS鋳型に組み込むことによって得られる。

さらに、擬態語動詞を活動動詞、働きかけ他動詞、場所移動動詞、心理動詞、生理的感覚動詞、物理的知覚、主語の属性描写という7つのタイプに分け、以上のLCSの骨組みを踏まえ、それぞれのLCSを設定した。

影山 (2005) は、結論として、擬態語動詞は「する」が意味構造の鋳型を表し、擬態語が具体的な意味内容を分担していることを示した。その結果、「擬態語＋する」全体の意味構造は通常の動詞のLCSと実質的に同じになると主張した。

影山 (2005) は擬態語動詞の動詞グループのLCSを検討した。研究対象については本研究とは異なるが、研究方法では本研究を進める上で参考になる。

2.3 習得動詞の範囲

前節で本研究の対象となる日本語「習得」に関する動詞の範囲を設定した。さらにそれらは、次のような動詞グループに分けられる。

(9) 日本語の「習得」に関する動詞の2つのタイプ:

活動動詞

勉強する、学習する、学ぶ、習う

達成動詞

修める、習得する、マスターする

(9)の動詞はすべて共通の意味内容を持ち、「知識・技能などを身につける」という意味を表す。その中で、継続活動を表す活動動詞と、活動の結果や最終的な目標に至ることを意味する達成動詞の2つのタイプに分けられる。

この動詞グループの意味構造を明らかにする前に、辞書における意味の解釈を(10)に記述する。

(10)『広辞苑　第六版』 (2008)
「勉強」
①精を出してつとめること。
②学問や技術を学ぶこと。さまざまな経験を積んで学ぶこと。
③商品をやすく売ること。

「学習」
①まなびならうこと。
②経験によって、新しい知識・技能・態度・行動傾向・認識様式などを習得すること、およびそのための活動。

「学ぶ」
①まねてする。習って行う。
②教えを受ける。業を受ける。習う。
③学問をする。

「習う」
①くりかえして修め行う。
②教えられて自分の身に付ける。まなぶ。

「修める」
事物を整った状態にする。
①乱れをただす。つくろう。
②言動をととのえ正しくする。
③学問や技芸などを身につける。学修する。

「習得」
習って会得すること。習って覚えること。

「マスター」
修得すること。熟達すること。

辞書の意味解釈を通して、これらの動詞は、それぞれ次の (11) のような意味的な特徴を持っていると考えられる。

(11) 習得動詞の意味特徴
勉強する：「努力する」という意味が含まれる。
学習する：知識・技能・態度・行動傾向・認識様式などを対象とする習得行為を表す。
学ぶ：人に教えられるのではなく、本や人の行動などから間接的にまねをする。
習う：他人に教えられ、練習を通して、身につける。
修める：学修する。
習得する：習って覚える。
マスターする：熟達する。

以上の辞書記述以外に、影山 (1996: 74-77) も英語の習得動詞についてhardとの共起関係について述べている。

(12) 影山 (1996: 75)
a. 少年は一生懸命に勉強した。
The boy studied hard.
b. 少年は一生懸命に英単語を暗記した。
*The boy learned the English words hard.

日本語では、「一生懸命」は「勉強する」にも「暗記する」にも使えるのに対して、英語のhardはstudyと共起するが、learnとは共起しない。その原因について、影山 (1996) は次のように説明する。studyが積極的努力を伴うのに対して、learnは練習や授業によって学ぶ受身的な過程を表すので、*I am learning very hard.のように積極的努力を表す副詞とともに用いることができない。また、learnとmemorizeを比較すると、memorizeはかなりの努力を必要とするから、memorize では「受身的な過程」という意味は重要ではないと判断される。むしろ、重要なのは、learnやmemorizeが「知識を獲得する」という結果を含意することである。例えば、I have studied English for eight years, but I can't speak it yet. に対して、*I have learned English, but I can't speak it. は意味的に矛盾すると影山 (1996) は指摘している。

以上のように習得動詞について、影山 (1996)は動詞それぞれの違いを検討した。しかし、本研究の目的は習得動詞の類義語を区別することではなく、習得動詞全体の特徴を明らかにすることである。これは次の節で考察していく。

3．習得動詞の語彙概念構造

影山 (1996) は、Vendler (1967) に基づいて、活動動詞と達成動詞を定義した。活動動詞は意図的に開始したり終了したりできる行為を表し、進行形をつけて継続中の意味を表す。達成動詞は何らかの活動の結果、最終的な目標 (状態) に至ることを意味する。この定義を習得動詞に当てはめると、日本語の習得動詞は前節 (9) のように2つのタイプに分けられる。

以上では、語彙的アスペクトのタイプによってそのまま動詞分類のラベルを用いたが、実際には具体的な動詞では概念が複合されていることが少なくないことが指摘されている (影山, 2008: 244)。この点について次に説明する。まず、習得活動動詞の場面を考えてみよう。「英語を勉強する」という場面には、英語の教科書を読む動作や英語の単語を暗記する動作や問題集を解く動作などがある。これらの動作(「読む」「暗記する」「解く」)は一つが引き起こされると、「英語を勉強する」という場面が成立する。また、「読む」「暗記する」「解く」という動作は、概念的にはいつまででも継続できる動作であるから、<活動>に当たる。「ピアノを習う」も同じように、幾つかの動作から成り立っている。つまり、楽譜を暗記することや弾く動作が必要である。これらも<活動>に当たる。一方、達成動詞の場合は、活動動詞とは異なっている。例えば、「スライドの作り方を習得した」という場面では、まず、スライドの作り方についての本などを読んで、パソコンでその作り方を練習するという動作が必要である。この「読む」「練習する」という動作は、活動動詞と似ていて、継続できる動作であり、<活動>に当たる。つぎに、時間が経つに従って自分でスライドを作ることができるようになる。この部分が目に見えない<変化・過程>と説明できる。これは<活動>と<変化>という2つの事態が時間の流れでつながる行為連鎖である。

行為連鎖の観点からみれば、習得達成動詞は活動動詞より局面が多く、概念もより複合的である。それぞれの意味概念を全面的に捉えるために、本節では、習得動詞を活動動詞と達成動詞という2つの場合に分け、それぞれの場合を検討していく。

3.1 習得動詞の活動動詞の場合

前節の (5) では影山 (1996) の活動動詞のLCSは [x ACT (ON - y)] で表記されている。自動詞の場合は非能格自動詞が主なものとして、他動詞の場合は接触・打撃動詞が主なものであるとされている。

日本語の習得動詞の活動動詞では、自動詞の場合、「勉強する」という動詞だけである。例えば、次のような例文で示される[1]。

(13)

a. 夜七時までTBSでリサーチの仕事があったが、帰ってから必ず、一時間でも二時間でも勉強する。
(BCCWJ) 真壁京子『気象予報士になりたい』

b. 端的に言えば、ひたすらランクの高い高校、大学を目指して勉強する。
(BCCWJ) 浜田寿美男『いま子どもたちの生きるかたち』

(13)の例では、「勉強する」には「努力する」という意味が含まれ、自動詞として使われている。つまり、「勉強する」のLCSは [x ACT] で表記される。

習得動詞では「勉強する」の自動詞の用法以外は他動詞である。

例えば、次のように習得動詞の他動詞の例文を示す。

(14)

a. データベースのしくみや情報検索の種類・手法を学習する。
(BCCWJ)『Information & Solution 新版情報B』

b. 日本とビジネスをする仕事をするならもちろん日本語を勉強する。
(BCCWJ)『日本語の開国』

c. 10歳のころから池坊の花道を習う。
(BCCWJ) 石塚晶子『和樂』

d. 日本舞踊家元の長男として幼少より踊りの基礎を学ぶ。

(BCCWJ)『あの人が選んだ東京手みやげ』

(14) のa. ～ d. の例文では習得動詞の被動作者(Patient)は具体的な内容であり、抽象的な事物でもある。活動動詞のLCSに当てはめると、[x ACT ON - y] のyが (14) の被動作者を指す。ここで問題が生じる。つまり、習得活動動詞の対象物は抽象的な事物でもあるから、習得動詞は影山 (1996) の記述したような接触・打撃動詞と同様には説明できない。特に、接触打撃動詞の作用対象の場所性を表す例文でI hit Bill's leg. のBill's legは「場所」の意味を表している。しかしながら、(14)の習得動詞の例文では、「手法」「日本語」「花道」「踊りの基礎」のいずれも場所性を表すことができない。従って、習得活動動詞は典型的な活動動詞とは異なるところがあることがわかる。

しかし、接触・打撃動詞との関係でいえば、日本語の習得動詞では動作主と被動作者との接触が完全にないのではない。この接触を抽象的な接触というように理解すれば、習得動詞では動作主が脳の中で認知的に被動作者と接触したと説明できる。つまり、動作主の脳の中の活動にインプットする認知的動作において被動作者の「手法」「日本語」「花道」「踊りの基礎」と接触する。このように考えると、習得活動動詞のLCSは [x ACT (ON-y)] で表示される。

次に影山 (1996) を参照して、2つの側面から考察していく。まず、習得活動動詞の状態変化の有無を確認して、ACT-ONの目的語は接触・打撃の及ぶ作用対象に過ぎず、状態変化の対象ではないことを明確にする。また、hardとの共起で接触・打撃の他動詞は、継続アスペクトを有するという点を明らかにしたので、日本語で副詞のhardと同義である「懸命に」との共起関係において検討していく。

状態変化の有無について (6) の例文で日本語の「てある」構文を見た。 (14) の習得動詞の例文を「てある」構文に変えると、非文になる。例えば、「*手法が学習してある。」「*日本語が勉強してある。」「*花道が習ってある。」「*踊りの基礎が学んである。」のように非文になってしまう。この現象の原因は、習得活動動詞が表す動作を通して、「手法」「日本語」「花道」「踊りの基礎」に状態変化が生じなかったからである。つまり、これらの活動動詞は状態変化のない動作であることがわかる。

また、副詞の「懸命に」との共起状況は例文を通して見てみよう。

(15)

a. 万次郎はエイキン、ジェームス両家の家事を手伝うかたわら、暇を見て自室で懸命に勉強する。
(BCCWJ) 津本陽『椿と花水木』

b. また高齢にも関わらず、一生懸命に学習されている姿に頭が下がる思いでした。
(BCCWJ)『Yahoo!ブログ』

c. 晴明は師にめぐまれ、懸命に陰陽道を学んだ。
(BCCWJ) 加来耕三『義経の謎<徹底検証>』

d. 随分歳がいった優しい和尚さんから一生懸命経を習っているところだった。
(BCCWJ)『Yahoo!ブログ』

影山 (1996) は、hardは未完了アスペクトの動詞を要求すると分析して、到達動詞、達成動詞、及び状態動詞はhardによって描写できず、残る活動動詞はhardで描写できることを指摘した。この状況を日本語に書き換えると、「懸命に」は習得活動動詞と共起できると考えられる。コーパスで検索した結果、「懸命に」「一生懸命に」のような副詞が「勉強する」と共起する例が多いが、「学習する」「学ぶ」「習う」と共起する例も見られる。(15) のようにa. c. の例文では「勉強する」と「学ぶ」が文の述語になっているが、b. d. の例文は「学習する」と「習う」が文の連体修飾語となっている。4つの例では習得活動動詞が「懸命に」「一生懸命に」と共起し、継続アスペクトを表している。

以上、習得動詞の活動動詞の意味構造を明らかにした。習得動詞の活動動詞は非能格自動詞の「勉強する」と抽象的意味での接触動詞の「勉強する」「学習する」「学ぶ」「習う」というような2つのタイプに分けられる。非能格自動詞の場合のLCSは [EVENT x ACT] で表記される。また、習得動詞は典型的な接触動詞と違って、作用対象の場所性は

ないが、習得活動動詞は抽象的な接触動詞として理解できる。さらに、習得活動動詞の目的語には状態変化がなく、継続アスペクトが見られるので、この場合のLCSは [EVENT x ACT ON-y] の構造で表記される。

3.2 習得動詞の達成動詞の場合

影山 (1996) によれば、達成動詞のLCSは [x / [EVENT x ACT (ON-y)] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]] で表記される。達成動詞のLCSでは、x が外項の主語を表し、y が内項の目的語を表す。

本研究では「修める」「習得する」「マスターする」を習得動詞の達成動詞の代表と考える。達成動詞は、主語の何らかの行為によって、目的語の状態変化ないし位置変化が引き起こされることを意味する。習得動詞の場合は、主語が習得行為を行うことによって、目的語の対象が主語の脳内への抽象的な位置変化を引き起こすことであると把握される。

達成動詞の概念構造ではCONTROLという表記が使われる。影山 (1996: 86) によれば、X CONTROL Y が表す意味は「XがYの成立を直接的に左右する」ということを表す。CONTROLは「Yの成立を直接的に左右する」という程度の意味であり、必ずしもYの成立を含意するわけではない。もし、Yの成立が含意されれば、CONTROLは使役の意味と解釈できるが、もしYの成立が含意されなければ、Yは「目標」という程度に解釈される。いずれの解釈になるのかは、認知的あるいは伝達上の焦点 (focus) または際立ち (salience) がXに置かれるか、Yに置かれるかによって決まる。例えば、次の例文のように、give, throw などはYに焦点があるが、bake, make などはXに焦点がある。

(16) 影山 (1996: 85)
a. Sue threw Bob a ball.
b. Sue bake Bob a cake.

この違いを表すために、影山 (1996) では次のように焦点の置かれる部分を下線で示している。

(17) 影山 (1996: 87)
a. 行為焦点: <u>X</u> CONTROL Y
b. 結果焦点: X CONTROL <u>Y</u>

また (17) の違いについて、英語は通常Yに焦点を置くが、日本語はXの方に焦点をおくことができ、そのために結果状態の完遂を必ずしも意味しなくてもよいことが影山 (1996: 87) で指摘されている。

習得動詞の場合、「修める」「習得する」「マスターする」の例文は次のようになる。

(18)
a. 十代の頃にピアノ、ヴォイス、音楽理論、ダンスを修めた。
(BCCWJ) 稲岡邦彌『ECMの真実』
b. そして核兵器製造にも用いられる遠心分離機を使ったウラン濃縮技術を習得した。
(BCCWJ) 高知新聞社『高知新聞』
c. 彼は「オヌシ、モ、ワルジャノゥー」という日本語をはじめ各種昔のひとの会話を完璧にマスターした。
(BCCWJ) 田中良成『超貧乏旅』

上述(18)の例文を解釈すると、主語は「修める」「習得する」「マスターする」のような行為を通して、目的語のダンスや濃縮技術や昔の会話といった抽象的な対象を主語の脳内に認知的に位置づける。達成動詞のLCSの[x / [EVENT x ACT (ON-y)] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]]の後半[BECOME [y BE AT z]]はここで抽象的な変化を表す。つまり、知識などを表すyを主語の脳の外の対象から脳内に取り込み、移動するという抽象的な過程として理解される。

また、(17) の行為焦点と結果焦点の問題について、(18) の例文を次のように解釈する。(18) c. には「完璧に」という副詞があり、これは行為が完全に完遂されたものとして理解される。つまり、焦点は [BECOME [y BE AT z]] にあり、CONTROL が使役 (CAUSE) を意味する。しかし、(18) a. と (18) b. には「完璧に」のような副詞がなく、[BECOME [y BE AT z]] の部分の成立が含意され

ないと考えられる。つまり、焦点は [EVENT x ACT (ON-y)] にあり、[BECOME [y BE AT z]] が目標となっている。

つぎに、習得達成動詞の限界性と漸次的・瞬間的変化について分析する。

まず、限界性について「完全に」「半分ほど」「～まで」などの程度を表す副詞との共起関係から見てみよう。これらの副詞は影山 (2008)では限界性のある場合として表される。習得達成動詞の例文は (19) に示している。

(19)

a. コンピュータは、それがたとえ多段階で複雑な手順でも、試行錯誤することなく一回の記憶で完全に習得することができます。
(BCCWJ) 池谷裕二『高校生の勉強法』

b. 例えばエレクトーンでもピアノでも、うまく弾けないフレーズがあれば何時間でも同じところを練習し、完全にマスターするまでやり抜く。
(BCCWJ) 高毛礼誠『あなたを忘れきれない男たち』

c. 6歳で上泉信綱に邂逅する以前の宗厳は、新当流その他の武芸を完全に修め、すでに兵法者としての名声は五畿内に高かったという。
(『朝日日本歴史人物事典』, 朝日新聞社, 1994年)

以上の例文では「習得する」「マスターする」「修める」は程度副詞「完全に」と共起できる。ただし、「修める」の場合、「完全に」と共起する例は多くはない。その理由は、「修める」は変化の最終局面に焦点を当てているからであると考えられる（「完全に」といった程度副詞を必要としない）。ここでは、「習得する」「マスターする」「修める」には限界性があると認められる。

また、漸次的･瞬間的変化について「少しずつ」や「徐々に」という副詞との関係で分析する。

(20)

a. もちろん指導者なしに、書籍や試行 錯誤で徐々に習得する事もできるし、多くの場合（たぶん99％近く）は問題なく探検を 進めていく事が可能である。
(http://www.speleology.jp/caving/vertical/vertical.html)

b. 日々少しずつでも地道に基本事項を習得していく。
(https://cms.passnavi.evidus.com/advice_subject/201508/11/)

習得達成動詞と「少しずつ」「徐々に」との共起関係を調べた結果、「習得する」とは共起できることが明らかになったが、「マスターする」「修める」との共起関係は見当たらない。つまり、「習得する」は漸進的変化動詞として認めることができる。

影山 (2008) によれば、漸進的変化は瞬間的変化と違い、MOVEで変化を表す。また、限界性のある表記も限界性のない場合とは異なる。つぎの (21) では漸進的変化のLCSの表記を示している。

(21) (影山, 2008: 254)
閉じられたスケールをもつ過程のLCS
[ ] y MOVE [State-Route $p_1 < p_2 < \ldots < p_n$]

習得達成動詞の概念構造は活動動詞の [EVENT x ACT (ON-y)] の上に、抽象的な状態変化 [BECOME [y BE AT z]] が引き起こされ、[[EVENT x ACT ON-y] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]] になる。また、CONTROLの問題に関しては、習得達成動詞は結果状態の完遂を必ずしも意味しない場合がある。さらに、限界性と漸進的・瞬間的変化の判断について、「習得する」のLCSが明らかになり、次のように表す。

(22)「習得する」のLCS
[[EVENT x ACT ON-y] CONTROL [[ ] y MOVE [State-Route $p_1 < p_2 < \ldots < p_n$]]]

4．おわりに

本研究は、「習得」に関する動詞の語彙概念構造を検討した。「習得」に関する動詞には2つの

タイプがあり、それぞれ [EVENT x ACT (ON-y)] と[[EVENT x ACT ON-y] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]] (「習得する」が[[EVENT x ACT ON-y] CONTROL [[　] y MOVE [State-Route p_1<p_2<…<p_n]]]) で表記される。また、本研究の目的はこの動詞のグループの意味特徴を全般的に明らかにすることであり、これらの動詞が相互にどのように異なるのかなどの問題は考慮していない。結論として、習得動詞は普通の活動動詞と達成動詞とは違いがあり、抽象的な意味的特徴が見られることが分かった。

注

1　本稿の例文はBCCWJで検索した。

参考文献

Dowty, David (1979). *Word Meaning and Montague Grammar: the semantics of verbs and times in generative semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: D. Reidel.

Jackendoff, Ray (1990). *Semantic Structures*, Cambridge. Mass.: MIT Press.

影山太郎 (1996).「語彙概念構造――動詞の意味タイプ」『動詞意味論』37-92. 東京：くろしお出版.

影山太郎 (2005).「擬態語動詞の語彙概念構造」2005年4月24日 関西学院大学 第2回中日理論言語学会研究会.

影山太郎 (2008).「語彙概念構造入門」『レキシコンフォーラムNo.4』239-264. 東京：くろしお出版.

金田一春彦 (1950).「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63.

Levin, Beth (1993). *English Verb Classes and Alternations: a preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.

Pinker, Steven (1989). *Learnability and Cognition: the acquisition of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

新村出 (2008).『広辞苑　第六版』東京：岩波書店.

Vendler, Zeno (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca. N.Y.: Cornell University Press.

コーパス

国立国語研究所, 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ), http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/.